社会情報学研究, Vol. 2, 13－25, 1996

言語とそれを取り巻く環境について
－ゲルマン系語の英国文化への影響を中心として－

後 藤　　信*

A Study of Language and Its Surroundings
－Mainly on Germanic Influence on British Culture－

Makoto Gotoh*

English is considered to be an international language all over the world and therefore its use is acceptable outside as well as inside the English-speaking world when we want to make ourselves understood to others.
For better or worse, we owe the universality and currency of the English language to the overseas expansion of the British Empire.

It seems inevitable that a great colonial power should exert its cultural and linguistic influence on the rest of the world. But when we shift our standpoint from the present to the distant past, we come to realize that the British nation was once a subdued nation.

Continental tribes invaded Britain one after the other across the North Sea or the English Channel.

First came the Celts, second the Romans, followed by the Germanic Anglo-Saxons' intrusions, the Danes' "hit and run" raids, and ultimately the Norman conquest.

During their submission to these aliens, British people devised an easy and helpful way to communicate with new-comers from overseas by making the structure of English concise and simple.

To conclude, it's not being a dominant world power but having flexibility to all other alien cultures that has laid the foundation and ground work for the future world language.

Key Words (キーワード)
Language and society (言語と社会), Simplification of inflections (語形変化の簡略化), Hybrid (混種語), The impact of Germanic language on English, (ゲルマン系語の英語への影響), Internationalization (国際化), Linguafranca (混合国際語)

はじめに

社会と言語の問題を考えてみる時に，人間の持つ言語は人間を取り巻く自然環境及び社会環境，特に政治や経済の状況の変化に人間が絶えず揺り動かされてきた事に気づくのである．それは人間の言語活動が受動と能動の二つの姿勢をもって社会と向かい合ってきた結果の産物であり，歴史的に集積された文化遺産に他ならない．

新しい言葉の誕生を促す環境上の変化や必要が

*呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

人間の言語感覚の創意を駆動させる．他国語の輸入を行う事よって現存の言葉の存在価値が問いかけられる．又在来の言葉の意味に新たな意味を付与したりしてその価値を更新したりする場合もある．

環境の中で人間や生物それ自体が生存のためある反応を示すのと同じように，言語とはその環境の変化に敏感な適応や反撥を見せる一つの“生きもの”であると言い得るであろう．

さてこの数百年間における英語人口が増殖し，発展した生命力，その勢いを見てみるとすざまじい potency を感じざるを得ない．

英語人口はエリザベス１世の頃と較べると現在迄およそ400年余りの間に何と約50倍に膨れあがっている．

また英語圏の国々の国際的な指導性や力量と言う点の評価を検証としてみると，先進国首脳会議の構成７カ国の中３カ国は英語を公用語とする国の代表となっている．

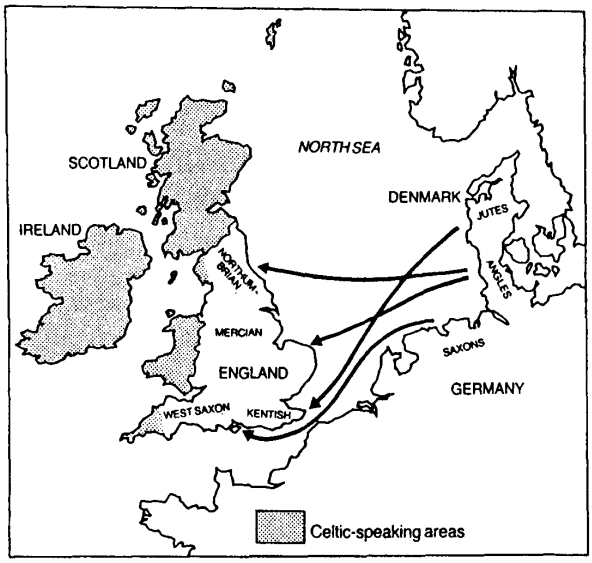
又英語の使用国を地域的な分布図から見てゆくと英国を出発点として大西洋を横断すると北米大陸では米・加両国がある．赤道以南に目を移すとアフリカ大陸では南ア連邦，太平洋地域には島大陸のオーストラリアそしてニュージーランドがその圏内に入っている．

次に近世の英国本国の歴史について触れてみよう．

1588年，スペイン無敵艦隊 Armada の来寇を打ち砕き，1805年には全ヨーロッパを既に制覇したナポレオンが派遣した仏・西艦隊をトラファルガー沖にて殲滅し，更に1940年には同じく欧州の覇者となっていたヒットラーの放ったナチドイツ空軍の飛来侵攻を撃退し，それによって，強力な独陸軍の上陸を未然に阻止する事に成功した英国は栄光の独立と言う言葉を正に劇的な絵として描き続けてきたような国である．

This royal throne of kings, this sceptered isls,
This earth of majesty, this seat of Mars,
This other of Eden, demi-paradise,
This fortress built by Nature for herself
Against infection and the hand of war
This happy breed of men, this little world,
The precious stone set in silvery sea,
Against the envy of less happier lands.
This blessed plot, this earth, this realm,
this England……

この歴代の王の王権に統べられた島，この尊厳に満ちた王土，この軍神マルスの領土，この第二のエデン，地上におけるパラダイス，自然の女神が外国からの悪疫を防ぎ，戦いの手から守らんとして築いたこの砦，この幸せな種族，この小宇宙たる別天地，しあわせ薄くしてねたみにとりつかれた外敵の悪意の手の侵入にそなえてみずからを守る城壁となり，館をめぐる堀ともなる，白銀の



Old English
The origins and distribution of the main dialects of Old English

図１　古英語における主要方言の起源と分布
(The English language David Crystal, Pelican) 156ページより転写[1)]

海に象がんされたこの貴重な宝石，この祝福された地，この大地，この領土，このイングランド……「リチャード二世」第二幕　第一場より　小田島雄志　訳

然しながらその英語の homeland である英国も千年前までは常に被侵略国の運命に甘んじていた時代があったのを忘れてはならない．

紀元前には欧州大陸で力を振るっていたケルト族によるこの島への侵入と移住，ジュリアスシーザーに端を発したローマ軍のブリテン島進駐，アングロサクソンの来寇，そしてその後の北欧ヴァイキングの度重なる襲来，そしてとどめをさしたのがノルマンフランスのイングランド征服とその後数百年の支配であった．

語彙の上ではノルマンの支配の時代になって奔流の如く入って来たラテン系の語に較べると英語全体の中で占めるゲルマン系の語の割合は比較的に少ないのも事実ではある．

然し現在に繋がる英語の原形が出来上がったのはアングロサクソン民族の英国への侵入，移住による時期と思われるので先ずはこの点から社会と言語の問題を取り上げてゆきたいと思う．

〔Ⅰ〕ゲルマン・スカンジナヴィア系の語の英語生成に及ぼした影響について

その1
ゲルマン系語族間の語彙，及び文化のの類似性について

England という言葉それ自体が，5世紀から6世紀にかけて現在の英国の土地に侵入した当時のゲルマン民族，Anglo-Saxon の一つであるアングル族 the Angles の土地 Angle's land，つまり Eng-landから生まれている事は語源上，誰もが認めるところであろう…… Anglese の故郷はドイツの Kielの近くにあって Angeln 地方の名で現存する……

cf. Anglo-Saxon の Saxon の名はドイツのプロイセン地方，旧東ドイツの州名として Saxony（英語），Sachsen（独語）としてその言葉をとどめている．又5～6世紀英国に侵入し Kent 州や Hampshire 州に定住したゲルマン民族の Jute 族の名は現在デンマークの一部をなすユトランド半島 Jutland として残っている．同じく9～11世紀に英国に侵入した Dane 人の名は Denmark の国名として残っている．

ところで English を形成するに当たってAnglo-Saxon や，その後，同じくブリテン島に侵入を繰り返した北欧のヴァイキングの果たした役割は大きい．

ところでゲルマン系の語とは今日のドイツ語を中核としてオランダ，デンマーク 更に北欧のノルウエー，スウエーデン語などを指している．

勿論，これから取り上げるゲルマン系語の中には，正確に言うと，祖を共通の印欧語としている点で間接的にはラテン系のロマンス語とも無縁とは言えないもの，更には Germanize されたラテン系語も含まれている．然し，ここでは，その点には余り深入りしないで，通常の分類においてゲルマン語系とされるものについて専ら焦点を当ててゆきたい．

ゲルマン系語は音声，綴り，文法の点で相互の類似性を持っている．

今日に至るまで英語として使われているゲルマン系の語の多くは一音節からなる日常生活用語を主とした素朴な語が多い．ラテン系の英語が抽象的な思考や各種の術語などに多く採り入れられているのと対照をなしている．

おおざっぱに言ってしまえば，日本語の場合の「やまと」言葉をゲルマン系，漢語ををラテン系言語に譬えることも出来よう．

次のページに示す表はアングロサクソンや北欧人の侵入期以来，英語となって現代でも使われている単語の幾つかを取り上げて，同じゲルマン系の他の国々の現代語との比較を試みたものである．

そしてその中からルーツの近似性，互いの影響度などを探ってみたいと思ったからである．

英語圏より地理的に離れたの国語の語彙の綴りと発音のずれを距離空間の隔たりの観点から眺めてみるのも興味深いものがある．

表1．ゲルマン系語の現代語間における相互の類似性，及び同じ語のラテン系語との対照

ゲルマン系語					ラテン系語		
英語	蘭語	独語	デンマーク	スウェーデン	伊語	仏語	西語
shoe	schoe	Shuh	sko	sko	Scarpa	chaussu	zapato
eye	oog	Auge	öie	öga	Occhio	Œil	ojo
clothes	Kleren	Kleiden	kläd	Klæde	Vestire	vêtir	vestir
cow	Koe	Kuh	ko	ko	Vacca	vache	vaca
day	dag	Tag	dag	dag	Giorno	jour	dia
earth	aarde	Erde	jord	jord	Terra	terre	mundo
friend	vriend	Freund	frände	frænde	Amico	ami	amigo
say	zeggen	sagen	siege	säga	Dire	dire	decir
house	huis	Haus	hus	huus	Casa	maison	casa
live	lev	leben	leve	leva	Vivio	vie	vivir
long	lanven	lang	lang	läng	Lungro	long	largo
work	werk	Werk	værk	verka	Lavoro	travail	travajo
water	water	Wasser	vand	vatte	Acqua	eau	agua
sea	zee	See	sø	sjo	Mare	mer	mar
folk	volk	Volk	folk	folk	Gente	gens	gente
navel	navel	Nabel	navle	nafle	Umbilic	nombril	umbilical
saddle	zadel	Sattel	sadel	sadel	Sella	selle	silla
saw	saag	Säge	sav	säg	Sega	scie	segur
glass	glas	Glas	glar	glas	Vetro	verre	dvidrio
rich	rijk	reich	rig	rik	Ricco	riche	rico
cake	koek	Kuchen	kage	kaka	Dolce	gâteau	bizcocho
way	weg	Weg	vei	väg	Via	route	camino
ride	rijden	reiten	ride	rida	Cavalca	aller	andar
church	ker	kirche	kirke	kyrka	Chiesa	église	iglesio
sail	zeil	Segel	sejl	segel	Vela	voile	vela
kiss	kussen	küssen	kysse	kyssa	Bacio	baiser	beso
ship	schip	schip	Schiff	skib	Nave	navire	bario
summer	zomer	Sommer	sommer	sommar	Estate	ete	verano
winter	winter	Winter	vinter	vinter	Inverno	hiver	invierno
home	heem	Heim	hjem	hem	Dimiora	foyer	hogar
wet	vochtig	Nåsse	vaad	våat	Umido	humide	mojado
hail	hagel	Hagel	hagl	hagel	Grandine	grêle	granizo
storm	storm	Strurm	storm	storm	Tempesta	orage	tormenta
rain	regen	Regen	regn	regn	Pioggia	pluie	lluvia
south	zuid	Süd	syd	söder	Sud	sud	sur
north	noorden	Nord	nord	nord	Nord	nord	norte
leg	been	Bein	læg	lægg	Gamba	jambe	pierna
hair	haar	Haar	haar	hár	Pelo	cheveu	pelo
hound	hond	Hund	hund	hund	Cane	chien	sabueso
heaven	hemel	Himmel	himmel	himmel	Cielo	ciel	cielo
hell	hel	Hölle	helvede	helvete	Inferno	enfer	infierno
drink	drinken	trinken	deinkke	drincka	Bevanda	boisson	beber
starve	sterven	sterben	sterven	svälta	Fame	faim	hambre
hay	hooi	hau	hä	hö	Fieno	foin	heno
swine	swijn	Schwein	svin	svin	Porco	porc	puerco
king	koning	König	konge	konung	Re	roi	rey

古代スカンジナヴィア語の英語への影響の足跡を英単語の中から拾ってみると

law

law とは that which is laid down 権威をもって主張されたもの，規定，定めなどの意味であった．デンマーク語で“認可”の意味を持つ lov やスウェーデン語の lag と語源を同一にするものである．

bylaw の場合の by は village, town の意味なのでこの語は地方自治体の条例を語源とし，内規，細則などの意味を表わす．Danelaw とはデーン人が占領したイングランド北東部で施行された法律及びその法律の施行された地方……チェスターとロンドンを結ぶ線のほぼ東側の地域……を言う．outlaw とは法の恩典と保護を奪われたもの，inlaw はその恩典や保護を奪われた人を復権させるというのが基本的な意味である

husting

英国の諸都市で開かれた都市裁判所，そして今日では壇上で議員候補者が政権演説を行う場所の意味をもっている．

riding

Yorkshire の東，西，南，北の3行政区域

ところで法律，司法，行政などの用語はその時代の支配者，統治者が定める場合が一般的である．Norman Conquest 以降に英語の中に現れて現代でも使用頻度の高い judge, jury などの語の多くはフランスを経由したラテン系の語である．

その他，ヴァイキングの襲来によるスカンジナヴィア文化の英国への影響，足跡として注目されるものに12進法の数え方がある．12人で構成する陪審員制度，長さの単位12インチ1フィート（foot）や，ごく最近まで見られた貨幣の単位12ペンス1シリングなどがある．13から数字の位取りが改まる方法を採る英，独共通の現象がこの事を物語っていると言える．dreizehn, thirteen（teen は ten が屈折した形で，teens とは 13 から 19 迄の数を指し，twenty の ty はteenの発音屈折なので twenty とは 文字通り two tens である）

三人称複数の人称代名詞 they their them も古スカンジ語からの移入語として知られている．

表2．北欧系英語の影響による同語源で意味及び綴りの違うもの

AS 系英語とその意味	北欧より移入された英語とその意味
break 壊す	breach 違反する
stick 突き刺す	stitch 針で縫い繕う
bathe 入浴する	bask 日光を浴びる
scatter まき散らす	shatter 粉々にする
skirt スカート	shirt シャツ
wake 徹夜で起きている事	watch 夜を四区分して交代で見張り当直に立つ
bathe 入浴する	bask 光を浴びる
whole 健康な	hale （老人が）達者な
rear 育てる，高く持ち上げる	raise 育てる，建物を築く
bridge 橋	brig 橋

*古代スカンジナヴィア語が英語に及ぼした影響としては，一足先にブリテン島に入っていた同じゲルマン Anglo-Saxon 系英語と北欧系英語との doublet の中にそれが見られる．

その2

複合語その他に於ける英，独語に見られる共通性

今日，既に日本語化された英語でもある input, output の単語に毎日接する時 input は put in, output は put out と分離すると，丁度 forthcoming を come forth として見た場合のように，語を分離することによってその意味が容易に理解できることに気づく．

独語の分離，非分離動詞と同じように英語の場合にも名詞や動詞の前に前置詞や副詞のついた形の語が見られる．

cf. 独語の例 zurückkommen, ausstehen

こうした語法は old English の頃，ゲルマン系のアングロサクソン部族が残した足跡と考えられる．

(1) withdraw, withstand, withhold

withstand に相当する独語は widersetzen でその意味は withstand と同様に“逆らう，反抗する”となっている．ところで with を一英和辞典によって紐解くと、1番目の意味とし ては，“いっしょに” 2番は“一致して”となっている．12番目になって漸く“反対して，敵対して” fight, argue, come into conflict の意味に出会うのである．然し歴史的に見ると敵対関係の意味が先に生まれて antagonism から nearness に発展していったのが英語の with である．

現在の独語の意味から昔の英語の意味をたどることが出来るのである．withhold, withdraw の場合についても同じ事が言えよう．

(2) understand, undergo,

standing under とは主人の下にいる，侍る事が主人の意のあるところを伺い知る，つまり，理解するところとなったのである．独語 verstehen の場合も同じ．

(3) overcome, overdo, overflow, oversee, overlive

(4) uphold, upbraid , upstart

(5) offspring, offshoot

(6) forget, forsake, forswear, forgive

for は元々 before の fore に端を発するゲルマン系の語で，独語の場合には vor である．

それはやがて from beside, against, beyond に意味を転じてゆく．forget はかくて保持できない neglect, と言う意味から，掴んだものを，記憶を，手放す，失う，の意味になってゆく．forget の独語は vergessen である．

(7) downfall

(8) onslaught

(9) insight, inroad(s)

“中を見る”から“看破”，そして“洞察”へと意味が拡がる

(10) answer

and swear と元々は二つの語から成り立っていたのがこの語である．and, swear のいずれもがゲルマン系の語である．and は蘭語では en, 独語では und がそれに相当する．

然しながら歴史的に見れば独語の非分離動詞の前に来る接辞語の ent-, ant- が英語の and との共通性を持つ．独語の entgegnen は“答える，言い返す”であり，antworten は“返事をする”である．

故に answer とは“and 反対して swear 誓う”と言うのがその由来なのである．[3)]

英語の名詞を複数化する場合に語尾に s ではなく -en を加え方法や，強変化による母音の部分を変えるやり方は英独共通であった古い時代の名残を示している．

語尾変化の例

（英） ox − oxen　　child − children

（独） die Frau ～ die Frauen

母音変化の例

（英） foot−feet　　goose − geese

（独） die Tochter ～ die Töchter

der Bruder ～ die Brüder

そして又英語の always などに残る副詞属格も独語の影響と見られる．in the morning を表す時の morgens などからも同じ源を辿る事の出来るものであろう．又，ＯＥ時代の英語には現在の独語のように名詞に文法上の性別の分類を行ったり，形容詞に格変化による語尾屈折を必要としていた．

ところで 英語の fortnight は文字通り fourteen nights で14夜２週間を表す言葉である．これはゲルマン北方民族が冬を過ごすのに短い昼間 day をもって時間を測定する単位とするのではなく，長い夜 night の過ぎるのを期待をこめて指折り数えてゆく．それによって季節の過ぎゆく時間の単位を定めていた当時の習慣の名残である．然し皮肉にも現在の独語では同じ表現に vierzehn tag と日が用いられている．又，英語の“水曜日”は Wednesday とゲルマン神話の主神 Woden，北欧神話の Odin の名に由来する語である．ローマ神話の神 Mercury にちなむ名を持つ水曜日を表す仏語の mercredi の場合とは対照をなしている．しかるにゲルマンの故郷である独語の場合，水曜日は Mittwoch，英語に置き換えると middle week と全く散文的な表現になっている．

〔Ⅱ〕近世以降に於ける独語の英語への影響について

その１

11世紀のノルマンによる征服以降外来語の移入は圧倒的にラテン系が多い．その中で独語から英語へと転じたもののごく一例で人口に膾炙されたものをここに紹介してみよう．

Putsch

独語，英語共に政権奪取を目的とする反乱や暴動を意味している．同じく輸入された仏語の *coup d' etat* も同じく暴力，非合法手段によって政権を奪う意味として英語に採り入れられている．意味上はともかく用法としては，クーデターの方が反乱規模が大きい場合に語として用いられているようである．ちなみに1923年にヒットラーによるミュンヘンのビアホールでの一揆の場合は Putsch，1848年のナポレオン３世の場合には *coup d' etat*，そしてやがてブルボン王朝の転覆にまで発展してゆく Bastille 襲撃に始まるパリでの一連の出来事は revolution と区分けされている．

rucksack

Rucksack の Rücken が人間の“背中”を意味し，Sack は英語と同様に袋を表す語である．独語の場合その発音は［rúkzak］，英語は［rʌ́ksæk］となる．

semester

ラテン語に源を発するこの語は *se-metris*，*secksmonatlich* ６ヶ月という意味即ち年２学期制の大学の学期を指す語である．それが言葉として**独語から英語**に輸入されている．

＊この場合，“月”を表す -mester のほうは本来ラテン語にその源がある．その mense(s) は日本語として日常的に用いられ，jargon の段階を越えて既に一般化されている．

seminar

この語もラテン語に源流を持つ．古代ローマにおいて seminarium と言えばそれは種子から植物を育む苗代であり，幼児を育てる保育園であり，又，学生の知識を育む研究道場であった．seminarius は“種に関する種子の”と言う形容詞である．名詞として使われる英語の semen，特に独語の Samen は性関連の語として知る人も多い．その後，中世には，聖職者，教員の養成機関として Seminar は発展する．近世に入ってドイツでは大学の授業形式を示す用語としてこの語は用いられるようになる．専門課程の学生がグループとなって教授の下で特定のテーマを定め創意に富む研究及び討論を行う．これの制度が英国に導入されて1889年にこの語は英語となる．ちなみに日本も戦後の初期の頃は，ゼミナールとドイツ式の発音を行っていた．最近は英語流のセミナーという言い方の方を寧ろ頻繁に耳にする．[4]

cf．ここに示した例の逆の現象として**英語から独**

語へと輸出され英語がそのまま独語として使われているものも多い．その幾つかを挙げてみると Sweater, Beefsteak, Pudding, Sandwich, Boxer, Golf, Hocky, Meeting, Sport, Babysitter, Boycott, Tunnel etc.

その2

独語の翻訳語となって生まれた英語及びAnglicizeされた独語の例

blue Monday

der blau Montag 元々の意味は 中世の頃，聖灰水曜日 Ash Wednesday に先立つ Monday に教会の祭壇に青い色の覆いがかけられた事に言葉の由来がある．後世になって blue Monday とは勤め人が休日の翌日，職場へ出勤しなければならない気の重い，憂鬱な，blue な月曜日の意味に転じた．1801年この語より派生した英語に black Monday という語もある．学生が長い休暇を過ごした後の初登校日の意味を表す．

cobalt

Kobalt の英語綴りが cobalt である．金属元素名では Co として記号が用いられている．

元々 kobalt は，いたずら好きな小妖精 Kobold によって銀とすりかえられた役に立たないものであるというドイツの俗信に由来する語である．

1685年

crown prince

独語の Krownprinz を英語綴りに書き改めたものである．独語の方は王位継承者の意味であるが英語では英国以外の皇太子の場合に用いられている．1791年

英国皇太子の場合には the Prince of Wales が用いられる．

cf. シェクスピアはハムレットの肩書き，呼称を1600年にその作品の中で the Princee of Denmark と記している．

dollar

16世紀から18世紀にかけて通用したドイツの銀貨 taler が doler という形でで英国に入ってきてそれはやがて dollar となった．そしてこの taler と言う語はその銀がボヘミア地方の J oachimtaler の近くの銀山で採掘された事に由来している．taler と言うのは valley を表している．1453年

＊独語の Tal，英語の dale（谷）は dollar と語源を一にするものである．

English disease

英国病とは最初は独語の englishe Krankheit「くる病」を表す言葉として1770年代に入って来た．その後英国の労働者の非能率さを指す語として1960年代に西ドイツで用いられるようになる．以後は英語としても労働者の怠業による生産性低下による社会的な病弊を表す語としての意味で英語でも定着してきている．

fatherland

これは Vaterland の英訳語である．そして祖国，故国を表す．この他，独語では“父なるライン，Vater Rhein”に見られるように Vater と言う言葉を好む．

ドイツの国歌は人も知るハイドンの弦楽四重奏曲「皇帝」の第二楽章である．ベルリンの壁崩壊の瞬間，歓びを抑えきれずに互いに抱き合った東西両民衆から洪水の如く沸きいでた，かの感激的な大合唱はテレビ画面を通して私達の記憶に新しいものがある．それに並ぶ国民的に親しまれている“*Die Wacht am Rhein* ラインの守り”の歌詞の中で Lieb Vaterland は繰り返されている．

1791年[5)]

homesickness

郷愁を表す独語 Heimweh の英語訳

独語の Heim は英語の home，そして Weh は hurt，woe に相当する．1756年

superman

ニーチェの用いた哲学用語 Übermensh に端を発している．それを George Bernard Shaw が英語化したものである．本来の意味は神に代わる理想的な超人を表していた．

最近ではアメリカ映画 superman シリーズが紹介されたりした事によってこの語にも意味の下落 corruption を招く．comic-book hero としての

鉄人スーパーマンのイメイジが定着化しようとしている.

この他，独語或いはドイツ文化の英語圏への定着化の例を見ると

Holy Night 又は Silent Night の場合，英語の歌詞をもって全世界に知られている．世界名歌曲集の中でも，本によってはこの曲を Song in German としてではなくて Song in English としてその中に収めている.

クリスマス　イヴに世界の多くの人達は季節の歌としても毎年この曲を感情をこめて英語で歌う．曲の原曲，原詩は実は独語で，Franz Gruber と J. Mohr の手によるものである.

またクリスマス　ツリーを飾る習慣は19世紀，ヴィクトリア女王の女婿であったアルバート公の故国の地ドイツより英国に移植されたものとして知られている．これは日の光の恵み薄き北国ドイツにおいて冬至の時期,常緑樹を飾ることによって人々が生命の永遠の願いをこめたもので，キリスト教伝来以前,異教徒の時代からあった習慣である．日本のお正月に門松を立てる慣わしとてこれと同種のものであろう.

ところで，Robert Browning の“ハーメルンの笛吹き男” The pied piper of Hamelin 及び Christpher Marlowe による“ファウスト” The Tragic History of Doctor Faustus は，ドイツの民話を資料にした英語による作品の完成となっている.

それぞれ故国のグリム及びゲーテの作品の先触れとして，或いは中継，後継の役を立派に果たして，英国の土にドイツ文化遺産の根をおろしている.

〔Ⅲ〕地名に見られるゲルマン系・スカンジナヴィア系の語の英語への影響について

地名の場合，江戸が東京と名前の変更を行ったりした歴史的な経験を日本人は持っている.

外国の場合も Byzantium が Constantinople へと移行し，更に Istanbul と地名を改めたり，ソ連時代の地名 Leningrad が帝政ロシア時代の St.Peterburg に戻った例などのに見られるように宗教的背景とか政治情勢の変化によってその名称が変わる場合を我々は知っている．然しながら一般的な語と較べてみると，地名などは長い時間を通してもその綴りや発音が変化しているのは稀であると言える．従って人名や地名の意味などから遠い過去の自然環境及び社会環境やそれに伴う人間の営みなどを推し量ることは可能である.

イングランドの場合，侵略した他民族が持ち込んだ自国の言葉をイングランドの土地の持つ自然条件や地勢的な特徴に合わせて命名したものが多い．その後それが地名として定着して，それらは当時のゲルマン系外来言語が移入した経過を物語る歴史的な証人となっている．ローマ，アングロサクソンそしてヴァイキングの相次ぐ侵攻の際に現住地を追い立てられた先住民民族ケルトは西へ北へ避難した．その移動先はウェールズやスコットランンドそしてアイルランドなどであった．従ってこの地域ではゲルマンの影響を受けることは少なかったのでケルト系の言語や地名が今も残る原因となっているものと思われる.

イングランドの場合地域によっても異なるが -chester, -caster, -coln がその語尾に付くようなローマ軍の砦や植民都市の跡を示す地名も散在する．川の名前の多くはケルト語を残しているが，その他となると都市名では London, Leeds, 州名では Kent, Devon くらいで極めて少ない．Lancaster のようにケルト系とラテン系の語を結び合わせて hybrid となっている地名もある.

-ing を語尾に持つ地名がある．～に属する人々とか土地を意味している．ドイツでは -ingen, 中部ドイツでは -ungen となる．英国では Reading などの都市名にそれが見られる．ドイツでは Solingen, Nibelungen オランダでは Scheveningen の地名がある.

-ham の場合 Durham 例でも分かるように ham とは home, homestead の意味である，hamlet は集落の意味として一般の語でも使われ

ている．ドイツには Mannheim, Rosenheim の地名がある．

Milton のように -ton を語尾に持つ地名がある．-ton は town(英) Zawn(独) の原形で -ham の場合より大きい集落や共同体を表している．

今日でも1,400以上の村や町に古代スカンジナヴィア系の地名を残している事実はその昔ヴァイキングを中心とする北欧系の人々の侵入のがあった事を物語っている．その歴史的な証人として，Derby, Rugby など語尾が -by で終わる地名をその資料として今日の人々に提出してくれている．その中には Ramgate のように -gate で終わるもの，その他 Denholme, holmsfield とか woodthorpe Lowestoft, Coperthwaite, Birdbeck などと多い．

このように地名を表す語の first elemennt 或いは second elemennt の意味を調べ英国とドイツ，北欧などの類似語を持つ地名の分布を調べてゆくといわゆるゲルマン民族の大移動の一環としてのブリテン島への移住に関わった民族と彼らが移住先に及ぼした言語や文化の影響度の実相が分かるのである．[6]

あとがき

私が幼少の頃，始めて世界地図に接した時，アジア，アフリカ地域の国々の殆どは西欧諸国の植民地であった．地図上の色分けもそのようになっていた．アジア地域では今日のヴエトナムは仏領，フィリピンは米領，インドネシアは蘭領となっていた．日本本土及び当時日本の植民支配地域，そしてタイ及び国内に多くの租借地や租界を持ち辛うじて独立を保っていた中国を除くと，その他のアジア地域の殆どは英領植民地一色であった．英領地域では公用語の英語，生活語の現地語が共存していた．このような政治，経済，言語環境のアジアの中で日本は英，米，蘭を相手に開戦の日を迎えた．それは私が小学校に入学後，暫くしての事であった．

当時はそれを大東亜戦争と呼んでいた．近世以後西欧の植民地支配に苦しむ東亜諸国のために西欧諸国のかけたくびきを解き放ち，その国の独立を助けるため，日本が立ち上がって西欧列強に戦いを挑み，大東亜共栄圏を樹立するための「聖戦」であると聞かされた．日本自身の他国への侵略の歴史については加害者の立場からの視点で特に教わる事もなかった時代なので「アジア人のためのアジア建設」と言うスローガンは子供心にとっては何とも説得力を持つものであった．

然し日本はその戦いに敗れる．

神生みませる大八州，御稜威あまねくこの聖なる地“豊芦原瑞穂国”の畳の奥座敷は敗戦の結果，連合軍の軍靴によって踏み込まれることになる，原爆を含む激しい空爆によって全国がくまなく焦土と化したその中，皇居前のビルの屋上には星条旗が，呉鎮守府庁舎屋上にはユニオンジャック旗がひるがえった．

日本は極悪な侵略国として世界から戦犯扱いを受けるに至る．結果的には戦後を契機に次々と独立を遂げていったアジア諸国からも日本は侵略国として疎まれているのが今日の姿である．

＊また戦勝国でありながら戦後英仏が海外植民地を失ったその原因として ***F. E. Halliday*** 氏はその著書の中で[7]次のように述べている．

The exhaustion of the chief colonial powers, Britain and France, after the war, and the ease with which the Japanese had overrun their possessions in south-east Asia, quickened the spirit of nationalism in the subject peoples and encouraged them to revolt.

Halliday 氏がここで述べているように日本が緒戦において，大英帝国の誇る英東洋艦隊の主力であった新鋭戦艦プリンス・オヴ・ウエールズ及び巡洋艦レパルスに正面から挑み，いとも簡単に撃沈させたことや，東洋の要塞シンガポールを陥落させたことがアジア人の長年懐いてきた西欧優位神話を崩壊させ，これらの民族に国家独立への勇気を鼓吹する結果を招いたのは事実と言える．

この点では日本が戦時中に掲げた東亜諸民族の解放のための聖戦の「大義」，いわば敗者側の主張が結果的には皮肉にも歴史上結実した一面を率直に認めたものと言えよう．

日本の場合，講和独立した後も日本各地に米軍は駐留し，基地は残り，そしてその後日本は政治の面では国際的な場において米国の世界戦略の良き理解者，追従者となり，一方，経済発展に専念した結果，日本企業の海外進出はめざましく，加えて，そのシーズンともなると日本人の“観光進駐軍”は欧米各地を占拠している．又，今日の日本を文化や社会システムの面から見るとアメリカの極東支店，outpost となっていると言えなくもない現実の姿がある．

戦後英語を始めとする横文字が日本語の中に激しく流入されている．国際化が叫ばれて英語教育を小学校の学習課程に導入する計画が取り沙汰されている．日本語学習の習熟度が今一歩の小学生に英語を学ばせようとすると，その結果として，国語たる日本語の運用力の未熟な人間を世に送り出す．そして又，そうした中で，現在の日本語の中に仮名文字外来語が安易に入いっている問題がある．これによって日本語が持っている固有の美しさ，スタイル，リズムが壊されているのではないかと嘆く声があるのも周知の事実である．

ところで京都などの古い町が新しい時代を迎えて再生，再開発の必要の問題提起を受けた時にも，人々から聞くのは現存の practice とか harmony の維持，再開発の反対と言う主張である．

エッフェル塔が古きパリの街に誕生した当時にそれは不調和な景観物として同時代の学識者や文化人には不評であった．然しながら今日では，統一された高さを持つ家並み，マロニエやプラタナスの街路樹，そしてセーヌ川などの周辺の環境の中にうまく融けこんでその個性と調和とを同時に保っている．今やパリの美しさのシンボルとなっている．同じ事が将来，新凱旋門やルーブル美術館のガラス製のピラミッドなどについて言えるかもしれぬ．

「言語」に話を戻そう．

sabotage が日本に帰化して「さぼる」と言う便利な日本語の動詞を生み又，ロンドンの仕立て屋通りの Savile Rowから「背広」と言う漢字文字で表記される日本語が生れた．使われ始めた最初の頃，日本人の反応がどのようなものであったかは知るべくもないが，今では自然な日本語として溶け込んで定着している．

英語は今，世界各国において第二の通用語として重要視され，国際会議や国際スポーツ交流の際の共通語となっている．それは19世紀において大英帝国が７つの海を支配し世界各地にその植民地を持っていた事や第二次世界大戦後その強国の地位を同じ英語圏の米国が受け継いだ事に起因するとは言える．然しここではそう言った winner に視点を当てての英語隆盛論を容認するものではない．

寧ろ中世に至るまでの英国が政治的には loser の立場にあった時期，つまり，打ち続く被植民地の状態にさらされた時期に英語は多くの点において他国語との接点を持つ．同時に Latin, Proto-German, Danes, Norman-French など多くのの異文化に対して寛大であり受容的であったがためにその時期を通して言葉の国際化，簡略化が進み，ゲルマンとラテンの混淆性を生んでゆく．

そしてそれはやがて今日の世界語へと至る道を開いたのではないかと言う試論を立ててみようとするのがこの小論の結論的な方向である．一言でいえば，新たなる創造は既成秩序からではなく chaos の中から生まれるものなのである．lingua-francaなど社会環境が自然に産み落とした結果の言語と言って良いであろう．

＊ 名詞，形容詞，定冠詞の語尾変化，強変化の動詞の活用など英，独を比較して見ると外国語としての習得上の便利性は英語に軍配の上がることは一目瞭然であろう．独語が black letter 髭文字からローマ字体に改めたのは今次大戦後であり，日本語が表音文字式綴り法を採り入れたのも同じく敗戦後の事である．

ともあれ，このような経過を通して英語は国際的な場で使い得る語として次第に磨かれてゆく．その結果言語上，最恵的な地位を築くための基盤作りが出来ていったのではないかと考えられるのである．[a~k)]

インターネットが登場して以来，米語を tugboat として英語の world language 化が一層普及の方向に向かっているようにも思える今日である．一方では近世において英語の世界語化の道を切り開く先導の役割を果たした英国は第二次世界大戦後多くの植民地を失った．

the last colony とも言われる香港の領有権が北京政府への返還される日も来年に迫ってきた．

嘗ての大英帝国の威信の低下に伴って本国のUKの中においても England 以外の地においては，これまでロンドンを中心として 三つの Cross を束ね，Union Jack の旗の下でまとまりを保ってきた文化及び言語の統一のたがが弛んできている現状がある．そしてケルト系民族の固有文化，GAELIC への復帰，復権の運動はスコットランド，ウエールズ，アイルランド，マン島，コーンウオール更にフランスのブルターニュ地方においても高まりを見せて来ている．北アイルランドの分離独立運動ほどの過激さはないにしても，北部ウエールズの学校では民族意識の高揚もあって，教室での言語教育の first language は Welshで，Englishは second language となっている．

緩やかながらこれまで歩んできた歴史の方向の見直しを求める姿勢が見られる．

過去の歴史の中で長い間ラテン系，ゲルマン系の言語 family と向かい合ってきた English はここに来て同一の島中でありながら，その発音や綴りだけでなく syntax においてさえ仏語，独語よりも遥かに異なる Gaelic への直視を求められている．

英語の生命は home において正にこのような形で落日の方向を見せているとも言える．

将来，米国の軍事的な権威が低下し，ドルの威信が失墜し，国連における米国の発言権が弱まるような事態が生じてその結果，英語を中心とした現在の世界通用語としての一元化が崩れてその機能を十分に果たさなくなる時が訪れたならば，その時，世界はバベルの塔の方向へ進んで行くのであろうか．

そしてその後，この狭くなった地球上において新たなる world language が出現するのであろうか．

人間界の出来事などすべて皮肉や逆説の連続であると言って良い．

結びの言葉としてシェークスピアの次の言葉を借りる事にしよう．

"There are more things in heaven and earth, Horatio, than are dreamt of in your philosophy". この天と地の間には学問など思いも及ばぬものがあるのだ．

参考文献

1）David Crystal, 1988, The English Language, A Pelican book, pp. 156.

2）Bill Bryson, 1990, Mother Tongue, Hamish Hanilton London pp. 45.

3）Constance M. Mattews, 1982, Words Words Words Kinseido, pp. 16～23.

4）後藤　信，1993 "欧米からの借入語とその語源的背景について"「研究紀要」作陽音楽大学・短期大学 第25巻，第2号，pp. 101.

5）Lavern Rippley, 1986, Of German ways, Gramercy Publishing Company, pp. 8.

6）C.M. Matthews, 1974, How Place Names began Eihosha, pp. 7～63.

7）F.E.Halliday, 1981, A concise History of England VOL. 2, SEIBIDO, pp. 74.

以下に示す文献には直接の引用箇所などは特にないが，論文作成に当たってテーマと構想の設定，そして立ち上げの段階においての全般的な基礎文献として利用したものである．論文全体の下敷きになっている筈の諸文献中の関連箇所は以下明示しておく．

a）Stanley Hussey, 1995, The English Lan-

guage, Longman, pp. 13～47.

b) Robert Burchfield, 1985, The English Language, Oxford University press, pp. 7～33.

c) Charles Barber -A historical introduction-, 1993 The English Language, Cambridge University Press, pp. 1～150.

d) L.Myets／R.L. Hoffman, 1980, The roots of English, Kinseido, pp. 1～72.

e) Robert Claiborne, 1991, The life & Times of the English Language, Bloolsbury, pp. 22～108.

f) Helen Clarke 1991 Towns In The Viking Age Leicester University Press pp. 35～45.

g) Otto Jespersen, 1938, Grouth and Structure of the English Language, Donald Moor Books, pp. 55～ 77.

h) 富沢 霊岸, 1988, イギリス中世史－大陸国家から島国国家へ－ミネルヴァ書房, pp. 1 ～101.

i) 富沢 霊岸, 1996, イギリス中世文化史 －社会・文化・アイデンティティー, ミネルヴァ書房, pp. 2～87.

j) T. G. ジョーダン著山本正三, 石井英也訳, 1994, ヨーロッパ文化, 大明堂, pp. 105～133.

k) 井上幸治編, 1993, ヨーロッパ文明の原型, 山川出版社, pp. 157～214.

使用した辞書に関して,

文中で例証した語彙, それぞれの語の発生源, 意味の由来などの検索, 確認に当たっては OED に加えて W. Skeat 1963 An Etymological Dictionary of English Dictionary Oxford at the Clarendon Press を主として利用した事を報告しておきたい.